2015.3.15
No.188

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

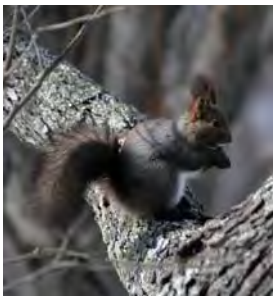
野遊び、山遊びの春がきました

３月に入って、野幌は一雨ごとに春の槌音が聞こえてくるようになりました。我が家の庭ではシジュウカラや、ツグミ、スズメがひときわ賑やかです。福寿草の開花ももうすぐです。野幌森林公園では、クマゲラのドラミングが森にこだましているそうです。晴れた日に、姿と声を確かめに行こうと思います。

私も雲や川の流れなどの生命力を感じたくてウトナイ湖のオオハクチョウを見てきました。つがいは湖のほとりで昼寝中。なかなか羽を広げてくれません。一瞬羽を広げるとキラキラ光る湖が華やかになりました。

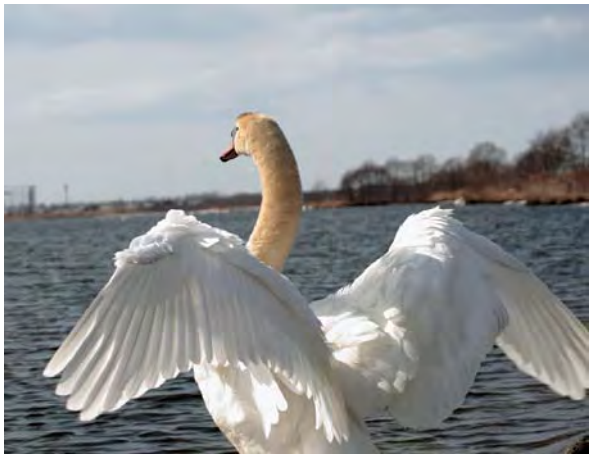
３.１１の震災と、福島の原発事故から４年がたちました。福島では今も１２万人が避難し、２万３千を超える人々が仮設住宅での生活を余儀なくされています。事故はいまだに収束せず、空や海、大地に放射性物質や汚染水が垂れ流されています。反原発の運動をしていながら、ふと福島の人々に思いをはせていただろうか？と反省しました。

札幌に避難してきた方たちのお話を聞いたり、福島の今を伝える映画や本から、福島の痛みをわが身に受け止め続けたいと思います。



後藤健二さん人質事件後、政権批判の自粛が社会に広がっていると感じます。ニュースステーションで、元経済産業官僚の古賀茂明さんが人質事件について「アイ・アム・ノット・アベ」と発言してネット上で「政権批判は許せない」と非難が殺到しました。自分の考えと相容れない発言に対する安倍総理の暴言は言論の自由を奪うものです。前号でも書きましたが、ネット上で個人の人格や尊厳を平気で傷つけるようなバッシングは、物言えぬ戦前を思い出させ、息苦しいです。

ドイツのメルケル首相が日本で講演しました。新聞で発言録を読んで一番印象的だったのは「自由に意見を述べられないところからは革新的なことは生まれない。社会的な議論も生まれない」と語ったことです。言論の自由の大切さを知っている人だなぁと感動しました。



写真：左上　支笏湖からの樽前山と風不死岳
左下ウトナイ湖のエゾリス　右中央ウトナイ湖のオオハクチョウ

おっさん政治はもう嫌だと「怒れる女子会in札幌」が発足しました。頼もしいですね。別の紙面で触れたいと思います。

今川かおるさんに「『捏造記者』ではないージャーナリスト生命をかけた植村隆さんの闘いを応援 」を、七尾寿子さんに「戦禍のイラクに生きる人々と私たちはつながれるか」を、「除染によって放射能汚染が広がる福島」を小野瑛子さんにご寄稿いただきました。是非お読みいただけますようお願いします。みなさまからのご寄稿もお待ちしています。

「捏造記者ではない」－ジャーナリスト生命をかけた植村隆さんの闘いを応援

「記者を殺してはならない」。2月14日、札幌で開かれた「植村応援隊発足＆札幌地裁提訴報告集会」。元毎日放送の西村秀樹さんの言葉が今も耳に残る。「ジャーナリストの命は記事を書くこと。記者が殺されると社会が殺される」

植村隆さんは朝日新聞記者として1991年8月、元慰安婦だった韓国の女性が調査団体に、自らの辛い体験を語ったという記事を書いた。この女性が後に初めて実名で名乗り出る金学順さんである。

それから23年。昨年2月『週刊文春』がこの記事に捏造のレッテルを貼ったことをきっかけに、植村さんへの言論テロとも言える攻撃が始まった。決まっていた神戸の大学教授転身はダメになった。高校生の娘さんはネット上で「自殺に追い込め」など脅しの言葉にさらされた。それだけではない。昨年3月に早期退職した後も非常勤講師を務める北星学園大学が、脅迫状やメール・電話による攻撃の標的になった。大学は攻撃に耐えられず、雇い止めに傾いた。

学者やジャーナリストたちはこの事態を民主主義の危機と受けとめ「負けるな北星！の会（マケルナ会）」を結成。支援の輪は弁護士や市民へ急速に広がり、大学は雇用継続を決定した。植村さん自身も言論の場で反撃を開始。『文藝春秋』新年号を皮切りに、複数の雑誌に反論手記を載せ、取材にも積極的に応じた。

12月20日には札幌で講演し、自分は捏造記者ではない、決して屈しないと宣言した。朝日新聞第三者委員会も植村さんの捏造を否定した。しかし、捏造の火付け役、扇動者たちは聞く耳を持たない。植村さんへの誹謗中傷、デマの拡大、大学への脅迫は今も続く。

「捏造記者」のレッテルはジャーナリストとしての死。汚名を晴らし家族らの人権を守り、大学の安全をとり戻すためには裁判も必要だ。大勢の弁護士たちに力をもらい、植村さんは法廷での闘いを決意した。本年1月9日、週刊文春で「捏造記者」とコメントした西岡力氏と発行元を被告に東京地裁へ名誉棄損の裁判を提訴。2月10日には札幌地裁へも同様の裁判を起こした。被告は西岡氏の言説を拡大し脅迫を肯定するような記事まで書いた櫻井よしこ氏、同氏の記事を掲載した『週刊新潮』発行元など3社である。

この裁判や言論活動を応援するため、植村さんの知人や友人などが呼びかけ、「植村応援隊」も1月30日に結成された。裁判の傍聴などを通じて一緒に闘っていく。あなたもmakerunauemura3@gmail.comへメールしぜひ参加してほしい。言論の封殺は民主主義の崩壊だ。これは私たち市民の闘いでもある。

私は主宰する文学講座の龍馬と加藤周一つながりで植村さんと知り合った。苦境を知り当初から応援しているが、植村さんは根っからのジャーナリストでいつも明るく前向き。だからこそ心からの笑顔を取り戻しいい仕事をしてほしいと切に願っている。

（植村応援隊・マケルナ会事務局　今川かおる）

戦禍のイラクに生きる人々と私たちはつながれるか

イラクチョコ募金の会

「イラクの子どもたちの医療支援でチョコ募金をしてます。1個500円ですよ。どうぞ！（正確には、1口500円のカンパでチョコ1缶プレゼント）」集会や、お店でバレンタイン近くになるとまるい缶にイラクの子どもが描いた絵のチョコを見た事があるのではないだろうか。道内でも、そのチョコ募金に協力しているグループがいくつかある。

イラクでは1991年の湾岸戦争と2003年のイラク戦争で使用された劣化ウラン弾の放射能が原因で小児がんや白血病が増加したと強く疑われている。JIM－NET（ジムネット　日本イラク医療支援ネットワーク）は、2004年、イラクの子どもたちの医療支援のために設立された。2011年の東日本大震災からは、福島原発の事故による放射能汚染から子どもたちをまもる活動、2012年からはシリア内戦の難民支援をヨルダンと北イラクで開始、と活動の幅を広げている。

支援は一方向ではなく、子どもたちの絵画展、写真展、本の出版、院内学級のイブラヒム先生のスピーキングツアーなどの交流がある。支援活動は、現地の人々のニーズに寄りそうことだが、紛争地で活動する困難は、わたしたちの思い及ばないことも多いだろう。10年続けて、まだ支援を必要とするイラクの苛酷な状況は切ないが、小さなチョコで繋がり続けたい。

映画「イラク　チグリスに浮かぶ平和」

綿井健陽監督の前作「リトルバーズ　イラク戦火の家族たち」は、2003年のイラク攻撃前夜からフセイン独裁政権が「大量破壊兵器」所持を名目に米英軍に倒され、その激しい空爆で幼い3人の子を喪ったアリ・サクバンとその一家が中心に描かれていた。

10年後、アリ・サクバン一家やイラクはどうなったかを追ったのが「イラク　チグリスに浮かぶ平和」である。紛争で、国家も経済もコミュニティーも疲弊し、誰もが家族の誰かを喪い、より状況が悪くなっている中、それでも、人は今日を生きる、という重いイラクの現状が迫る。

滔々と流れるチグリス川に船を漕ぎだすひとときだけが、爆撃を受ける不安から免れ、家族が平和でいられる、というシーンは印象的だった。

紛争地域を取材するジャーナリストが伝える、風景、確かにそこに生きる人々の存在感、思い、命や死の手触りを受けとめたい。

2004年イラク拘束事件の「自己責任」論や後藤さんたちへの「国に迷惑かけるな」論を越えて。

イラク戦争は、日本も加担した。国としてその検証をし、アラブとの外交のパイプをつくらなければ後藤さんたちの死に向き合うことにはならない。

（イラクチョコ募金の会・七尾寿子）

除染によって放射能汚染が広がる福島

３月６日～８日まで福島県南相馬市からいわき市までの「浜通り」を訪問しました。震災後４年の現地を、自分の眼で見て、自分の心で感じたいと思ったからです。

実は、この地域には２年前にも訪れています。そのときは地震と津波に破壊され、原発事故の放射能によって無人と化した荒寥たる光景に胸が痛みました。ところが今回は、その同じ地で、大勢の人が働き、トラックや乗用車が何台も行き交い、バリケードはほとんど撤去されていました。原発事故後は分断され閉鎖されていた常磐高速道や６号線も開通しています。除染作業が進められているのです。

除染には賛否両論があります。福島を復興させるには、産業や経済を活性化させ、避難している人々を呼び戻し、かつてのコミュニティを再構築しなければならない。そのためには、除染して放射能を減らさなければならない。

一方、除染して一時的に線量を下げても１年もたてば元の木阿弥になる。除染して避難指定区域を解除し、避難した人たちを連れ戻せば、被ばくは増える。除染作業のほこりや除染廃棄物処理などによって、日本中に汚染を拡大する結果にもなる。除染は無意味である、といった反対論もあります。私は反対論を支持します。

国の政策は2020年の東京オリンピックまでに、なにがなんでも福島復興を実現させたい。そのために膨大な費用をかけて除染作業を行っていますが、そこには目を疑うばかりの利権がはびこり、除染作業員も犠牲になっています。こんなことは即座にやめさせたい。しかし、今の私たちには、安倍政権にＮＯをつきつけ、政治を変えるだけの力はありません。国の政策をくつがえさせる力になるのは国民ですが、いまの福島の現状に気づき、自分の問題としてとらえている国民は少ないと思います。

私は、いっそこのまま国はやりたいようにやればいいと思います。それに逆らう力はないのだから。ただ、その犠牲になるのが福島県民だけであってはならない。全国民が犠牲にならなければならない。全国に汚染が広がり、全国民の健康や暮らしが破壊されてはじめて、福島の痛みを知り、自分の問題としてとらえ、政治を変えようという力になるのではないか。極論ですが、そこまでの覚悟を固める時期に来ていると思います。私は覚悟しました。家族も犠牲になるでしょうがそれも致し方ありません。

その時期（国が変わる時期）が少しでも早く来るように、その時期までの健康障害が少しでも減るように、健康障害に侵された人たちが少しでも回復できるように、「少しでも」の努力を続けなければならないと思います。　（原爆語り手・小野瑛子）

オッサン政治にNO！「怒れる女子会」に100人

年齢も仕事もさまざまな女性たちが、オッサン政治にNO！をと政治や社会問題などを自由に語り合う「怒れる女子会in札幌」が、２月２８日札幌エルプラザで開かれました。

参加者たちは「黙っているとどんどん息苦しい社会になる」と市民が積極的に声をあげていく必要性を訴えました。

独善的で他人の意見に耳を傾けない政治を「オッサン政治」と名付け、これに疑問を持つ女性らが意見を述べ合う「女子会」は昨年１１月に東京で初めて開かれ、札幌の集会は市内の女性らが中心となり企画し、１００人を超える人たちが集まりました。男性の参加もありました。

話し合ったテーマは原発、特定秘密保護法、集団的自衛権、環太平洋連携協定（ＴＰＰ）、労働福祉です。道内で活動している女性がテーマ別に１人ずつ、１０分間話し、その後集団討議で、意見を紙に書いていきテーマごとにまとめました。

2.28のキックオフ熱はまだまだ続きます、国政に私たちの思いを伝えて行く必要があります。

次回は、統一地方直前スペシャル「選挙と無関心」で３月25日(水)18時半から、札幌市民ホール会議室１で開きます。

今の政治に怒っているみなさん、是非参加してください。（撮影：怒れる女子会）

泊原発緊急事態！その時、私たちはどうなる？

泊原発の廃炉をめざす会の講演会が3月9日にありました。

「原発避難計画の検証」というテーマで、上岡直見さん(環境経済研究所代表）が講演し、現段階での国や自治体の避難計画や政策は、まったくの無責任体制であり、再稼働は許されるものではないと強調しました。

どのような条件を設定しても、多数の住民を制約時間時間内に一斉に動かすことは困難であることが、シミュレーションで明らかになりました。（写真：避難経路を示した泊原発周辺図）

やはり原発のリスクはきわめて大きく、被曝せずに避難することは不可能だと事実やデータを通じて改めて認識しました。

つい先日、岩内町から蘭越町や寿都町へ行く国道229号線が土砂崩れの恐れのため通行止めに。暴風雪で小樽へ向かう5号線も通行止めに。いずれも避難道路として重要な路線です。

春 BOOKs

さまよえる町
フクシマ曝心地からの「心の声」を追って

三山　喬著
東海教育研究所　1800円＋税

福島県大熊町の住民は、東日本大震災の原発事故で避難生活を強いられています。

著者の三山さんは、事故直後から３年余りにわたって、全国各地で避難生活を送る町民を訪ね、話を聞き率直に語られた言葉を記録しました。

足尾銅山鉱毒事件を象徴する場での話から始まります。福島県須賀川市で避難生活を送っている鎌田清衛さんは研修旅行で無人になった谷中村を訪れた時、名もなき農民たちの怒りや口惜しさ、喪失感が我がことのように胸に迫ったと語ります。国策優先で被害を受けた住民が故郷を追われた点で、原発事故と重なって見えたからでした。

大熊町は事故を起こした福島第一原発の１号機から４号機までの全てを抱える町です。被災者には町役場の職員や地元政治家、歌人や普通の庶民もいます。反原発か否か、帰還するか否か、除染を進めるか否か。住民の間でも強く賛否が分かれ、多くの人がどう答えていいのか言葉を探します。被災者の言葉から町の実像を描き、被災者と共に考え原発事故の本質に迫ります。

大熊町は原発関連の交付金や就業、人口増で、暮らしが急速に豊かになったのです。原発の恐怖感を短歌に表した男性でさえ、東京電力の補助を見込んだ文化施設の建設に関わったと話します。

原発を誘致した地域性から、避難先で町民たちは「自業自得だ」と中傷もされます。

本書はそこに生きていた人々の生活史を掘り起こしてもいます。農業や出稼ぎ、祭などの記憶は、被災者に、心豊かに暮らした時代を彷彿させます。

被災者の思いを丹念に掬い取った言葉は、原発とは何だったのかを問うています。

事故がもたらした複雑な人間模様を浮き彫りにし、賛成した人たちの苦しみも伝わってきます。

大熊町の住民に笑顔が戻る日があるのだろうか？と私が同じ立場だったらと考えさせられました。「心の声」を追った記録は、読み飛ばすには重くて何度も立ち止まり、ようやく読了しました。

崖の下の花

北嶋節子著
こうち書房　1800円＋税

著者の北嶋節子さんはあとがきに「フィクションを交えていて、ある特定の学級をモデルにした話ではない。そうであっても、私と子どもたちとのかけがえのない思いや願いで紡ぎ出されてきた物語であることに変わりはない。（中略）できることなら、もう一度あの子どもたちと学級をつくりともに笑い、悩み、学習し、生活して、その時々に生まれる輝きのひとつひとつに揉まれてみたいとも思っている」と書いています。

本書は軽度の発達障害を持った子と悩みながら成長する教師の奈緒とクラスの子どもたちが描かれます。

司が交通事故で入院した時の子どもたちの気持ちが素敵です。司にたたかれた子どもが何のわだかまりもなく司を励ます姿にジーンとしました。「いつも頑張ってやろう！っていうのが司君だったじゃない。・・・司君がいたらなあっていつも思っているのにさあ！みんな、司君のことを考えているんだよ」。司の思い出の文集の一節には「ぼくはカッとなったり、ボコボコにしたりしてしまってほんとうにごめんなさい。そしてみんなありがとう」とあり、クラスみんなの気持ちが司に伝わっていたことを知り、私も温かい気持ちになりました。クラスがまとまっていく過程が丁寧に描かれています。たぶん、沖縄の小学校に転校しても、きっと司は大丈夫！と奈緒も晴れやかな気持ちで見送れたのではないでしょうか？

北嶋さんの教師としての体験が反映された作品ですが、なかなか思うように子ども達を指導できないで悩む奈緒が、発達障害のある司の気持ちに寄り添う姿が印象に残りました。

私事ですが私の夫は昨年３月で定年になりましたが、再雇用で、荒れた中学校に赴任。授業が成り立たないほど騒ぐ生徒たちもいたそうです。なんとか魅力ある授業をと、毎晩自宅で遅くまで授業の準備をして出かけて行きます。理科の実験は、特に入念に準備していました。支えたのは３０数年、仲間と続けてきた「教授学研究会」です。斉藤喜博先生が提唱した授業です。「今日の授業はすごく上手く行ったよ」と帰ってくる日が多くなっていきました。大変だけどいい仕事だなと思います。夫の姿と重ね合わせて読了。読後感は「苦あれば楽あり」青空を見上げるように爽やかでした。

人間は料理をする
上　火と水
下　空気と土

マイケル・ポーラン著
野中香方子訳
ＮＴＴ出版2600円＋税

食の分野で活躍するジャーナリストである著者が世界中を駆け回ってさまざまな料理を修業する物語です。

古代の四代元素である火・水・空気・土に分けます。

人類は料理のおかげで高度な文明を築けました。しかし今、加工食品を買い、料理をしない人が増えています。これは人類に重大な影響をもたらすのではないか?と著者はこの問題を考えるために料理修業に旅立ちます。

バーベキューはまさに遠い先祖の記憶を呼び起こす儀式ともなっています。神話を紐解けば、人類最

初の料理の記録に行き着く。次に土器を開発し、食べられないものをも食べられるようにしました。さらに穀物を粉にし、水で練り、それを焼く。また発酵させて空気を取り込み、ふっくらと体積を増やすことを学び、極めて効率のよいカロリー摂取の方法を確立。また微生物を利用し、発酵の技術を磨き上げ、独自の旨みを引きだし、飛躍的に保存性を高めたのです。

著者は各料理ジャンルのエキスパートに弟子入りし嬉々として忘れられかけた料理法の再現を試みます。食料の生産現場に立ち返り、食生活の原点回帰を目指します。

愉快な料理修業を通じた多くの気づき、ユニークな料理人たちとの出会い、そして深い教養に裏打ちされた文明論が満載。料理という世界の奥深さを知ることができます。

冷凍食品やファーストフード利用で、素材のうまさを生かすのではなく、出来合いの調味料等を利用して料理に時間をかけなくなりました。そのことが幸せだろうか？と著者は問います。問題になっているTPPも食の安全を脅かしますね。

著者は家族で簡単に料理できる冷凍品をスーパーに買いに行き、いざ調理してみると、電子レンジで解凍するのに多大な時間を要したことを書き、じっくり料理する方がむしろ時間がかからないのではないか？と皮肉な結果をユーモラスに伝えています。料理は、家族のコミュニケーションを深める効果もあると書きます。

私も共働きの習性で、出来るだけ早くと手抜き料理ばかりが得意になりました。料理って奥が深いんですね。この本で学びました。

清冽
詩人茨木のり子の肖像

後藤正治著
中公新書　740円＋税

「わたしが一番きれいだったとき」「倚りかからず」などの詩で知られ、2006年に79歳で死去した茨木のり子さんの生涯を丹念に追ったノンフィクション作家の評伝です。

近親者のほか、詩人の谷川俊太郎さんや元ＮＨＫアナウンサーの山根基世さんら親交があった人たちにも取材し、詩人茨木さんの「凜とした姿」を浮き彫りにしています。

４８歳の時に、医師であった夫の三浦安信さんをがんで亡くします。その後の人生を著者は「覚悟と潔さを貫いた姿勢、それは人格といっても品格といってもいい」と記しています。また「それは天賦のものであると同時に、そうであろうとする意志力によって自身を磨いた結果であると私は思う」と書いています。

生前に親しい人たちに別れの言葉を準備して、誰にも看取られずに自宅で亡くなった茨木さんは孤高を貫いた見事な人生でした。

茨木さんは韓国語を学び、「ハングルへの旅」をまとめ、「韓国現代詩選」を刊行しています。語学教師の金裕鴻さんは茨木さんを「口には出さずとも日朝にまたがる負の近代史を意識し、それを受け止めつつ未来につながる方途を模索する意思を感じた」と述べています。

戦争への怒りを女性としてうたい上げた「私が一番きれいだったとき」は多くの教科書に掲載され、米国では反ベトナム戦争運動の中でフォーク歌手ピート・シーガーが『When I Was Most Beautiful』として曲をつけた話は有名です。彼女の心の声が国境を越えて人の心を打ったのでした。詩の一部を紹介します。《わたしが一番きれいだったとき/街々はがらがらと崩れていって/とんでもないところから/青空なんかが見えたりした/わたしが一番きれいだったとき/まわりの人達が沢山死んだ/工場で　海で　名もない島で/わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった/（略）わたしが一番きれいだったとき/ラジオからはジャズが溢れた/禁煙を破ったときのようにくらくらしながら/わたしは異国の甘い音楽をむさぼった/わたしが一番きれいだったとき/わたしはとてもふしあわせ/わたしはとてもとんちんかん/わたしはめっぽうさびしかった/だから決めた できれば長生きすることに/年とってから凄く美しい絵を描いた/フランスのルオー爺さんのように　ね》

一番知られている詩は「倚りかからず」です。詩集としては異例の15万部が売れました。《もはや/できあいの思想には倚りかかりたくない/もはや/できあいの宗教には倚りかかりたくない/もはや/できあいの学問には倚りかかりたくない/もはや/いかなる権威にも倚りかかりたくない/ながく生きて/心底学んだのはそれぐらい/自分の耳目/自分の二本足のみで立っていて/なに不都合のことやある/倚りかかるとすれば/それは/椅子の背もたれだけ》

茨木さんの真っ直ぐな感性と意志を感じます。

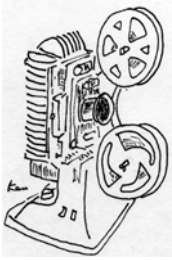
「鄙（ひな）ぶりの唄」は1991年の作品。ボストン交響楽団が来日したときのことでした。《なぜ国歌などものものしくうたう必要がありましょう/おおかたは侵略の血でよごれ/腹黒の過去を隠しもちながら/口を拭って起立して/直立不動でうたわなければならないか/聞かなければならないか/私は立たない　坐っています/演奏なくてはさみしいときは/民謡こそがふさわしい/さくらさくら/草競馬/（略）/それぞれの山や川が薫りたち/ 野に風はわたってゆくでしょう/それならいっしょにハモります》

自由な精神を保つという事は大きな覚悟が必要なのだと、茨木さんの凛とした姿勢から人間としてのあり方を教わりました。茨木さんが今の時代に生きていらしたら、集団的自衛権行使容認にきっとこの詩で反論されたのではないでしょうか？

清冽な生き方は誰にでも真似のできることではありませんが、せめて茨木さんの詩を繰り返し読み、私の糧としたいと思います。

遺言　原発さえなければ

豊田直巳・野田雅也共同監督



福島第1原発事故が発生した翌日の２０１１年３月１２日から２０１３年４月までの800日間にわたって福島の住民の過酷な生活を記録した3時間45分にも及ぶドキュメンタリー映画です。監督は二人のフォトジャーナリスト。

上映会場は４００人でいっぱいになりました。

積み上げた酪農家人生が一瞬にして壊れたという酪農家のリーダー・長谷川健一さん。事故から２週間後調査に入った今中哲二助教は、原発から30キロ離れた飯館村が強い放射能に汚染されたことを村に報告します。それまで村の住人には知らされていなかったのです。絞った牛乳も野菜も廃棄処分。家族のように、大事に育てられていた牛たちがトラックに乗せられていく場面が辛かったです。空っぽになった牛舎が、原発事故の理不尽さを物語ります。牛舎を残し、福島市内、山形、横浜と、家族バラバラに離散していくのです。

隣接する相馬市の酪農家仲間が自殺します。堆肥小屋の壁に、チョークで書き残した言葉が「原発さえなければ」「残った酪農家は原発に負けないで頑張ってください」でした。

その遺言を守るかのように、酪農家たちは新たな暮らしに挑戦しはじめます。

飯館村はいつものように、見事なサクラが咲き、緑豊かな野原、そして美しい雪景色。その故郷を奪われた飯館村の人々の悲しみと怒りが胸に突き刺さりました。

人々の営みや尊厳がどのように破壊されてきたかを丹念に記録し、風化しないよう、記憶にとどめようとし、多くの被災者の思いを聞き取った労作でした。私もその場に居合わせ、長谷川さんらと一緒に悩み、怒り、泣いた、3時間45分でした。

原発のない社会にしていかなくてはという強いメッセージを受け止めました。各地で、是非上映会を開いて、原発事故で人生が暗転した人たちの思いを聴いて下さい。

イラク
チグリスに浮かぶ平和

綿井健陽監督

戦火のイラクを見つめ続け、ある家族の１０年間の軌跡を描いたドキュメンタリー映画はジャーナリストの綿井健陽さんが制作しました。

綿井さんは講演で「戦争の実態を伝えることで、次の戦争を防ぐ力になれれば」と語りました。

１０年前の空爆翌日、病院で血だらけの娘を抱えたアリ・サクバンと出会った綿井さんはその後のサクバン家を取材し続けてきました。アリは自宅を爆撃され、３人の子どもを失いました。

バグダッドが陥落した後も、平和は訪れず、多くの市民が、爆撃や銃弾で殺されていきます。残された家族と共に、懸命に働くアリ。戦乱が続く中で、日常を守ろうとする人々の姿を描きます。このドキュメンタリーの素晴らしさは普通に暮らす人々の気持ちを聞きとっていることです。

２013年、綿井さんは６年ぶりにバグダッドを訪れますが、アリが露店で仕事をしていた時に武装集団に銃撃されたと知らされます。何の罪もない市民が爆弾や銃撃に倒れていく戦争の理不尽さを語る言葉が突き刺さります。ある人は「戦争に関わったすべての人に責任がある。黙っていた私たちにも責任はある」と語ります。アメリカの武力進攻を支持した日本にも責任はあります。

題名は、チグリス川の船の上が一番安全だというひとことでした。サクバン家との家族のような付き合いがあってこその貴重な映像です。

戦争は始まったら簡単には終わらない。一人ひとりにかけがえのない人生があり家族があると、丁寧に取材して伝えます。まるでアリ・サクバン家族が自分の家族のように思えて、老いた両親の嘆きが痛切でした。

綿井さんは「希望を奪われようとしている人たちに自分たちで何か希望のようなものをもたらすことはできないか考えること、それが世界をもっとも危険にさせないために必要なこと、その現状を伝えてくれるジャーナリストの存在が大切だ」と語りました。

集団的自衛権行使の容認でかつての戦前に戻ろうとしています。今の政権を傍観していてはならないのだと思います。

ミルカ

インド　ラケーシュ・オームプラカーシュ・メーラ監督

物語はミルカ（ファルハーン・アクタル）が、1960年、ローマオリンピックでゴール直前に振り返って４位に終わった場面から始まります。数々の記録を打ち立て、国民的人気を誇り、金メダルが期待されていました。

何故、後ろを振り返ったのか？その背景には、パキスタンとの分離独立戦争で、肉親を奪われた悲劇がありました。故郷バンジャーブを追われたミルカが、子どもの頃の悲惨な出来事を乗り越えて一流のアスリートになるまでの軌跡が描かれます。

難民キャンプや軍隊を経て、走力を見いだされ陸上チームにスカウトされるのです。インド代表から受けた差別を実力で跳ね返していきます。想

像を絶する人生の困難に走ることで立ち向かったミルカ。ミルカ・シンは実在の人で、自伝を読んだ監督が映画化しました。
　主演のファルハーン・アクタルは体脂肪率を5％まで落として本作の撮影に挑んだそうです。走る姿が美しい。
　150分という長さを感じさせず、テンポよく物語は展開します。ミルカの才能を見いだした人や、友人などに出会い、成長していく過程も丁寧に描かれています。難民キャンプでは村一番の美女との恋もあり、成功したミルカが幼い頃別れた唯一の家族である姉と再会する場面等。劇中の音楽がどれも素晴らしい！
　炎に包まれた街を走り抜ける子ども時代のミルカの姿も描かれ、アスリートとしての成功からは想像もできない壮絶な人生を知りました。生き抜くために走り続けたミルカの半生に涙をこらえきれなかったです.。
　平和への願いがこめられた作品。素晴らしい映画なのに、あまり宣伝されなかったのか、１０人にも満たない観客で残念でした。ＤＶＤで是非ご覧ください。

ジミー、野に駆ける伝説

イギリス・アイルランド・フランス
ケン・ローチ監督

　1932年、ジミー・グラルトン（バリー・ウォード）は内戦後のアイルランドに米国から10年ぶりに帰ってきます。仲間たちに歓待されたジミーは年老いた母親との平穏な生活を望んでいましたが、村の若者たちの訴えに衝き動かされ、閉鎖されたホール（集会所）を再開させます。多くの若者が集うようになり、音楽やダンスなどの文化活動を楽しむようになりますが、娯楽を禁ずる教会からも封建的な地主らからも自由な活動を妨害されます。
　自由で喜びに満ちた人生のすばらしさを説いた、ジミーの語る言葉が胸に響きます。労働者でもあった“名もなき英雄”ジミーの私利なき高潔な精神が、緑生い茂る大地の美しさに彩られ、混迷の時代に生きる私たちに、自由に生きるとは、を問いかけます。
　ジミー・グラルトンは実在の人ですが、ほとんど資料は残っていないそうです。演じたウォードは「幼いころ、彼にあったという村人や親類に話を聞いた。民話のように語り継がれてきた英雄で、彼らの話から、寛容で温かく、人の痛みを我がことのように感じる人間像だ」と語っています。誰をも惹きつけるおおらかさと、哀愁を帯びたジミーをウォードが好演しています。
　ジミーが国外追放になる時、たくさんの人々が自転車で駆け付けていつまでも見送るシーンが印象的。人々の不屈の思いが素晴らしい。思いを共有するかのように、ホールが明るくなるまで誰も席を立ちませんでした。
　アイルランドの風土が作る哀愁のある音楽と風景がすてきでした。いつか行ってみたいと思っています。

シャトーブリアンからの手紙

フランス・ドイツ合作
フォルカー・シュレンドルフ監督

　ナチ占領下のフランス西部のシャトーブリアン郡の収容所で27人の政治犯が処刑された史実を映画化。監督は「ブリキの太鼓」で知られるドイツのフォルカー・シュレンドルフ監督です。
　ドイツ将校が暗殺され、ヒトラーは報復として収容所のフランス人150人の銃殺を命じます。パリのドイツ軍司令本部は命令を阻止しようとしますが徒労に終わります。処刑者リストの中には17歳のギィ・モケがいて、彼の殉教的な死がレジスタンス神話の発火点となったことは歴史的な事実です。しかし、シュレンドルフ監督はギィを、家族を愛し、恋する普通の若者として描きました。27人の政治犯たちが銃殺される直前に、モヨン神父に家族や恋人への手紙を託すくだりで、個々の苦渋と悲哀に満ちた表情をクローズアップで執拗にとらえたシーンが印象的でした。迫りくる一人ひとりの死を同等の重さで掬い取ろうとするシュレンドルフの強い意志が伝わってきます。
　映画では、困惑するドイツ軍将校、処刑リストを作るフランス人役人も登場し、抵抗を試みるもヒトラーの命令には逆らえず、同胞の虐殺に加担してしまいます。
　処刑の場面、杭を立て、２７人を３回で銃殺する場面は記録映画のように淡々と再現し、過去の歴史から目を背けてはならないと訴えます。シュレンドルフ監督は「何が正しいかを自分で考える勇気を無くしたら、シャトーブリアンの悲劇はまた起きる。責任は集団ではなく、常に個人にある」と語り、この映画を通して一番訴えたかったことでした。
　ギィの手紙を受け取った恋人の「夜明けの海は静かに眠っている。でもきっと、変わる時がくる」と言う言葉が、フランス解放を予感させます。両親への手紙には「もちろん僕は生きたい。でも心から願っていることは、僕の死が何かの役に立ってくれること。１７歳と半年の短い人生。何も悔いはありません」。歴史を記憶し過去から学び乗り越えていくことを訴えていて、感動で心が震えました。
　こうした映画が独仏合作で制作されたことは、戦後ドイツの過去の歴史の克服と、独仏和解の成果です。日本は中国・韓国に対して戦争責任を果たしていません。この映画は多くのことを私たちに問いかけています。
　ドイツのメルケル首相も、フランスとの和解があったから国際社会に受け入れられたと発言していましたね。過去の歴史に向き合わなくては日中や日韓共同でこのような映画の制作は不可能でしょう。戦争への道に向かおうとしている日本。多くの人に観ていただきたいです。

イーダ

ポーランド・デンマーク　パヴェウ・パヴリコフスキ監督

歴史の波に翻弄された戦後ポーランドを背景とした18歳の少女の成長物語を、モノクロの映像美で叙情的に描きます。

60年代初頭のポーランド。孤児として修道院で育った少女アンナ（アガタ・チュシェブホフスカ）は、初めて会った叔母ヴァンダ（アガタ・クレシャ）から自分の本当の名前がイーダであること、そしてユダヤ人であることを明かされます。両親はなぜ自分を捨てたのか、自身の出生の秘密を知るためイーダは叔母ヴァンダとともに旅に出ます。

社会主義時代のポーランドで叔母は「赤いファシスト」と恐れられる検察官でした。当時の苦い記憶に苦しめられながら、すさんだ日々を送っていました。

対極を生きる2人を象徴するかのような、光と影のコントラストが美しいモノクロの世界。

ポーランドはドイツとソ連に翻弄された歴史があり、ユダヤ人でなくても思想犯はアウシュビッツで殺されたのです。しかし、ポーランド人も、ユダヤ人を迫害した事実はあまり知られていないと思います。二人は歴史の闇に埋もれた過酷な真実を知ることになります。

４日間の旅が終わった時、二人の内面にも変化が起きます。自ら死を選ぶ叔母。自らの意思で生き直そうとするイーダ。

イーダが、修道女の頭巾を脱ぎ、髪を見せ、修道服を脱ぎ、叔母の服を身につけ、不本意な生を生きた叔母の自堕落の訳も理解しようとします。つつましいイーダの心の変化の描写も抑えがきいて好ましい。つかの間の恋も描かれます。心象を表す、ジャズやバッハやモーツァルトの音楽。言葉は少ないですが、イーダと叔母の心模様が伝わってきて素晴らしかったです。静謐で余韻が残りました。

第87回アカデミー賞では、ポーランド映画初となる外国語映画賞を受賞しました。私はポーランド映画祭で観ました。

馬々と人間たち

アイスランド　ベネディクト・エルリングソン監督

美しく雄大な自然を舞台に繰り広げられる人と人、人と馬、馬と馬の愛の物語が、馬の視点で描かれているのがユニーク。小型の愛らしい馬たちは、いずれもアイスランド馬です。島国アイスランドで１０世紀以上も交雑することなく純血が保たれてきたそうです。おとなしくて人好きのする彼らはアイスランドの人々にとって家畜であると同時に家族や友人でもあり、ときには恋人のような存在だということを映画は物語ります。

ほとんど知られなかったアイスランド馬。馬たちの魅力に存分に触れることができました。特に村中の人と馬が集うラストは壮観でした。

私も馬には愛着があります。祖父母は、日高の沙流川近くで農業をしていました。広大な土地で米や農作物を生産するのに、馬もたくさん飼っていました。他の家畜もいましたが、祖父はとりわけ馬を大事にしていました。仕事のない日は日中放牧するのですが（山林も持っていました）やんちゃな馬もいたのでしょう。私が小学校１～２年生の時だったか、夏休みで祖父の家にいた時、放牧した馬が帰ってこないと、祖父が探しに行ったことがあります。ほどなく見つかったのですが、祖父の安堵した顔を思い出しました。祖父の家には馬の品評会で優勝した賞状と愛馬にまたがった祖父の写真が飾られていました。今、その光景はありません。亡き祖父がこの映画に呼んでくれたような気がしました。

あとがき

今号は、３人のご寄稿があり、豊かな紙面になりました。山紀行に代わるものです。さまざまな市民運動をしている人たちを是非紹介したいと思いました。問題になっていることの今が、リアルに伝わってきます。/昨年から受講していた「龍馬講座」が終わりました。龍馬が書いた「藩論」はデモクラシーの源流というお話がありました。当時の先見の明に驚かされました。/みなさまからのご寄稿をお待ちしています。（み）

購読料とカンパをありがとうございます（敬称略）
2015.1.17～3.10

赤坂京子（札幌市）富森保枝（室蘭市）志堅原郁子（札幌市）久野真紀子（様似町）カンパ含む　沢田正（広島市）カンパ含む　尾嵜弘子（札幌市）カンパ含む　内田篤のり（札幌市）六百田麗子（福岡市）カンパ含む　北嶋節子（横浜市）松川洋子（札幌市）カンパ含む　沼崎勝弘（札幌市）カンパ含む　塚本裕子（札幌市）木村玲子（札幌市）塩川哲男（札幌市）カンパ含む　菅沼宏之（札幌市）カンパ含む　志田郁夫（山形市）カンパ含む　加藤多一（小樽市）カンパ含む　竹田とし子（函館市）カンパ含む　山本博（福岡市）かンパ含む　飯部紀昭（札幌市）前原満之（宮崎市）新西孝司（札幌市）水野隆夫（今帰仁村）韮澤千代（江別市）阿保亘（帯広市）金尾誠一（富山市）カンパ含む　遠藤浪子（千葉市）カンパ含む　合計102、000円

web読者からのカンパ　岡本惠子、今川かおる、大関裕美子、水越和江、鈴木澄江、岩渕雅輝、太田朋子、藤田春美、大久保勉、新井喜美子、佐藤雅彦　合計18、000円　紙媒体読者との合計 120、000円は印刷代と送料に使わせて頂きます。カラー印刷費が高く困っていましたが、友人からの多額のカンパもあり、当面は今まで通りでお届けできます。ご協力ありがとうございました。振込口座は02740-7-56535「銀河通信」はそのまま使えますが、ゆうちょ銀行口座をお持ちの方は1900-33109571 樋口みな子（銀河通信だけの専用）が便利です。